

## 巻頭言 「伸びる枝」

宇野 元

いただいた花束が、ひととき、牧師館に華やぎを与えてくれました。

最初に薔薇がしおれ、トルコキキョウが枯れ、オンシジウムや可憐な花たちが散り、そのたびに花器を取り替えて、さいごに残ったのがアイビー。

三週間近くになります。今も小さなガラスの器のなかに活けてあります。

近くで眺めると、きれいな緑色の葉っぱ。屋外で見るのとひと味ちがう趣があります。唐草模様のようなおもしろい形。

ふと、たのしい幻想に誘われます。アイビーの唐草模様のような枝が、クルクルと伸びてゆく。どこまでも。ジャックの豆の木のように。ヨナのとうごまの木のように。あるいは、イエスのたとえのからし種のように。

「主なる神は、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に影をつくった」(ヨナ書 4,6)。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」(マルコ福音書 4,30-32)。

聖書は、神の愛による望みにあふれる将来を、高く大きく伸びる枝と共に約束しています。

「わたしは背く彼らをいやし、喜んで彼らを愛する。まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。露のようにわたしはイスラエルに臨む。……その若枝は広がり、オリーブのように美しく、レバノンの杉のように香る。その陰に宿る人々は再び麦のように育ち、ぶどうのように花咲く」(ホセア書 14,5-8)。

「その日には、と万軍の主は言われる。あなたたちは互いに呼びかけて、ぶどうといちじくの木陰に招き合う」(ゼカリヤ書 3,10)。

「平和の種が撒かれ、ぶどうの木は実を結び、大地は収穫をもたらし、天は露をください……。一つの町の住民は他の町に行って言う。『さあ、共に行って、主の恵みを求め、万軍の主を尋ね求めよう。』『わたしも喜んで行きます。』」(同上 8,12.21)。